

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370467

研究課題名(和文)中国語方言におけるtone sandhi生成メカニズムに関する通時的研究

研究課題名(英文)Diachronic study on the formative mechanism of tone sandhi in Chinese dialects

研究代表者

岩田 礼 (Iwata, Ray)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：10142358

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国語諸方言にみられるTone Sandhi(声調交替)について、通時的变化のメカニズムを解明することを目的とした。中国語方言でみられるTone Sandhiの現象を網羅的に収集し、データの分析を通じてTone sandhiの類型化を進めた。また、それらを地図上に反映させることで変化の過程と原因を推定した。これらの作業の結果は一連の国際会議で公表した。また、中国の研究協力者と共同で、江蘇省北部地域を対象として、「調値の体系」を類型化し、調値変化の過程とTone Sandhiとの相互関係を検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at exploring the mechanism of diachronic change of tone sandhi in Chinese dialects. Specifically, we exhaustively collected relevant materials, and through analyses we typologized Chinese tone sandhi. The proposed typology was depicted by means of linguistic map, and the process and the cause of changes were estimated based on the observaion of geographical distribution with reference to the synchronic analysis of the data. The fruits of these works were presented in some international conferences. As a model of microscopic investigation, we also proceeded the joint research with Chinese scholars. Focusing on the area of northern Jiangsu, we typologized the tone values systems, thereby speculating the interaction of tone values and tone sandhi from a diachronic perspective.

研究分野：中国語学

キーワード：中国語 声調 Tone sandhi 類型 調値 調値体系 方言地図

1. 研究開始当初の背景

Tone Sandhi(又は“声調交替”、“連続変調”)とは、声調が環境(それが立つ位置、前後の声調など)によって異なる実現形態を取ることを指す。中国語方言は豊かな Tone Sandhi のバリエーションを有しており、近年では国際的な研究ターゲットになっている。しかし、従来の理論的研究は、代表的な Tone Sandhi の類型を説明する原理を個々に説明するにとどまり、中国語方言全体を見通せる原理を提示するには至っていない。そのため、同じ中国語方言の Tone Sandhi が相互に関連性のない様々な類型のアマルガムであるとの印象も与えている。現行の理論的研究に欠けているのは通時的観点である。また、Tone Sandhi の各類型が地理空間の中でどのように分布しているかという言語地理学的な研究もなされていない。

2. 研究の目的

上述のような学術的背景の下、本研究は次の目的を設定した。

- (1) 中国語諸方言にみられる Tone Sandhi(声調交替)の現象を網羅的に収集、整理し、類型化の結果を全国地図の形式で表現すること、また地図に基づく言語地理学的解釈と各方言内部で見られる共時的諸事実を総合し、Tone Sandhi の成因と歴史的变化のプロセス及び動因を検討すること。
- (2) Tone Sandhi の基礎をなす「声調調値体系」を類型化し、これも全国地図の形式で表現し、声調変化の過程と Tone Sandhi との相互関係を明らかにすること。
- (3) 上記(1), (2)を検証するために、特定地域を対象として微視的(microscopic view)に変化のプロセスを観察すること。

3. 研究の方法

以下の手順で研究を進めた。

- 1) Tone Sandhi に関する基礎データの蓄積

と類型化

既刊方言資料に基づいて、方言ごとに Tone Sandhi の類型を帰納し、その結果をデータベースの形式で蓄積した。類型化は本研究代表者が提案した“中和”(neutralization)の観点から進めた(岩田 2001 など)。これはシンプルな基準であり、すべての Tone Sandhi パターンは4類型のいずれかに帰納できるとの予測に基づく。4類型のいずれかを定めた上で、下位分類を進めた。

2) 声調調値体系の系統分類

声調調値の体系を調類との関係で捉え、類型化することで、Tone Sandhi との関係把握した。この作業は、声調調値の通時的変化に関する平山久雄教授の「環流説」(平山 2005:173-287)と調値体系の系統分類(平山 1984 など)を参照しながら進めた。

4. 研究成果

(1) Tone sandhi の全国分布

全国的にみて際立った特徴は、長江流域(下流、中流)に前後の声調に依存しない文脈自由(context free)型の類型が分布し、それを挟んで北方官話地域と東南沿岸部に文脈依存(context dependent)型の類型が分布することである。これは一種の ABA 分布であるが、南北の文脈依存型には歴史的な関係がないと考えられる。以下、地域別に得られた知見をまとめる。

長江流域の類型は調類間の中和(歴史的には“合流”)が進んだ形態を示すが、これは北方官話方言で発達したストレスアクセントが伝播した結果である。呉方言では、その後ストレスが衰退した結果、声調特性の right-spreading だけが残った。現在、大都市の方言ではピッチアクセントが発達し、ピッチの下がり目が知覚上の cue として用いられている。

北方官話方言の文脈依存型は一部地域で、調類間の中和の結果、文脈自由型に転換した方言がみられるが、全体としては音声的

な異化による sporadic な中和が多い。これに対して、閩東を中心とする東南沿岸部の文脈依存型は、多数が文脈自由型から変化したものであり、変化の原因はやはり異化であるが、体系的な変化を起こした方言が多い。また、閩東に隣接する浙南では、逆に文脈依存型 > 文脈自由型の変化が起きた方言もある。

文脈自由型における中和の一つの特徴は、調値の平板化傾向である。

陽調は陰調に比べて中和(合流)が生じやすい。

中和(合流)を回避した結果である chain shift は、閩南方言だけでなく、一部の呉方言にもその痕跡がみられる。

東南沿岸部を対象とした方言地図の一例を示す。



(2) 微視的観察

「声調調値体系」の類型化は全国規模では達成しえなかったが、江蘇師範大学・蘇曉青教授との共同研究を通じて、江蘇省北部地域を対象とした微視的観察と詳細地図の作成を進めた。次の知見が得られた。

声調調値体系の各類型は地理的に連続分布を示し、調値の変化が漸進的に進んだことを示している。

類型間の境界地域では、ほとんど例外なく

特異な現象が現れ、接触・衝突によるインパクトを物語る。

Tone sandhi における調値は簡略化、平板化傾向がみられる。

(3) 派生的課題

北方官話方言及び長江流域方言における Tone sandhi の成因として、ストレスの発達が考えられることから、Donna Erickson 博士などの協力を得て、3D-EMA(Electromagnetic Articulograph)を用いて下顎の動きを測定する実験を行った。ストレスの実現には下顎の動きが主要な役割を果たすこと、並びに北方官話方言にはフレーズレベルの Iambic stress が存在する可能性が高いことを明らかにした。

引用文献

岩田礼 2001: 中国語の声調とアクセント, 『音声研究』5-1.

平山久雄 1984: 官話方言声調調査値の系統分類, 『言語研究』86.

平山久雄 2005: 『平山久雄言語学論文集』, 北京, 商務印書館.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

石汝杰 「关于吴语研究史的若干问题」, 『吴语研究』(第七届国际吴语学术研讨会论文集), 2014 年 6 月, 57-63.

〔学会発表〕(計 4 件)

石汝杰 「关于汉语连读变调的思考」, 全国汉语方言学会第 17 届学术年会暨汉语方言国际学术讨论会, 暨南大学(广州、中国), 2013 年 12 月 13 日~15 日.

Iwata, Ray, “Mapping the Chinese Tone Sandhi (Preliminary Report)”, 2nd International Conference on Asian Geo-Linguistics (ICAG-2), Chulalongkorn University, Bangkok (Thailand),

May 24-25, 2014.

岩田礼 「閩語連讀變調的類型及其地理分佈」, 第十屆台灣語言及其教學國際學術研討會, 成功大學(台南市、台湾), 2014年10月25~26日.

Iwata, Ray, Donna Erickson, Atsuo Suemitsu, and Yoshiho Shibuya, "Articulation of phrasal stress in Mandarin Chinese." The 2015 Autumn meeting, the Acoustical Society of Japan, Aizu University (Aizuwakamatsu), 2015年9月16日.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

研究成果報告書(Collection of unpublished papers)

『中国語方言における tone sandhi 生成メカニズムに関する通時的研究』, 2016年3月. 岩田礼、石汝杰及び2名の研究協力者(蘇曉青、

増田正彦)の未公表論文5篇を掲載。

国際シンポジウムの開催

“東アジア言語地理学国際シンポジウム The International Symposium on East Asian Geolinguistics” 2015年11月5日, 主題: 音声(特に声調), 金沢市文化ホール; 2015年11月7日、8日, 主題: 言語地理学一般, 富山大学人文学部。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 礼 (IWATA, Ray)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 10142358

(2) 研究分担者

石 汝杰 (SHI, Rujie)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号: 50278149